



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 『徒然草』第二十一段考：「人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたる」を中心に  |
| Author(s)    | 謝, 立群   |
| Citation     | 詞林. 2002, 31, p. 37-46  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/67481">https://doi.org/10.18910/67481</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『徒然草』第二十一段考

—「人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたる」を中心に—

謝 立群

はじめに

「徒然草」第二十一段は、心を慰める自然現象を列挙した段で、次に掲げるのがその全文である。

よろづのことは、月見るにこそ慰む物なれ。ある人の、「月ばかりおもしろき物はあらじ」と言ひしに、又ひとり、「露こそ猶あはれなれ」と争ひしこそ、おかしけれ。おりにふれば、何かあはれならざらむ。

月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に碎けて清く流る、水のけしきこそ、時を分かずめでたけれ。「沅湘昼夜東に流れ去る。愁人のために止まること暫くもあらず」といへる詩を見侍しこそ、あはれなりしか。嵇康も、「山沢に遊びて魚鳥を見れば、心樂しむ」と言へり。人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたるばかり、心慰む事はあらじ。

第二十一段末尾の「人遠く、水草清き所」という部分につ

いて、「徒然草」の最初の注釈書である「徒然草寿命院抄」は、「トツ国ハ水草キヨミコトシケキ都ノ内ハスマヌマサレリ 玄賓僧都ノ歌也。」（『徒然草古注釈集成』勉誠社、一九九六年）と、玄賓の和歌を掲げ、これを念頭に置いた表現であろうと指摘している。以後の注釈書はしばしば『寿命院抄』のこの考えを踏襲する。例えば、『徒然草文段抄』は、「江談云。「外国は水草清し事多き君が都は不住まされり」此詞を用るなり。これかの嵇康が詞を受て。世のまじはりを絶て閑なるところに吟行するほど慰事はなしと也。」（改訂増補徒然草文段抄）青山堂書房、一九二六年）と述べ、『徒然草抄（警斎抄）』は、「此草子水草とばかりいへども、外国のことしげからぬといふころ、此歌にゆづりてか、ぬ筆法也。」（国立国会図書館蔵本・寛文元年刊）と述べている。

しかし近年、安良岡康作氏「徒然草全注釈」（角川書店、一九六七―一九六八年）は、「水草清し」の言葉が、『源氏物語』にも見えることを指摘している。若菜上の巻における明石入道の消息に、「今は、ただ、迎ふる蓮を待ちはべるほど、その夕

まで、水草清き山の末にて勤めはべらむとてなむまかり入りぬる。」(新編日本古典文学全集)とある。<sup>1)</sup>

玄賓の和歌の背景には、玄賓が嵯峨天皇によって大僧都(又は僧都)に任じられたが、辞退し、和歌を残して遁去したという説話が存在する。この説話は「江談抄」、「閑居友」、「古今著聞集」などに収められ広く知られる。伊藤博之氏が「玄賓の話は周知のこととされ、さらに遁世者の最高の規範として敬慕されていたらしい」と指摘しているように、兼好も玄賓の和歌をよく知っていたはずである。また、兼好の念頭に「源氏物語」の叙述があつた可能性も十分に考えられよう。しかし、特に注目されるのは、三木紀人氏「徒然草全訳注(一)」(講談社学術文庫、一九七九年)の、「水草清き」あたりに玄賓のおもかげはあるものの、直接引き合いに出されているのは第一八段同様に古代中国の隠逸の作品であつて、わが国の隠者文学への言及らしきところはない。」という指摘である。

第二十一段に直接引用されるのは、戴叔倫と嵇康である。この両者との関連から「人遠く、水草清き所にさまよひ歩くの表現に着目した時、想起されるのは屈原のイメージである。本稿はそのような視点から解釈を試みたい。

## 一 「漁父」に描かれる屈原

屈原は、戦国時代、楚国の人である。記憶力がよく、文章

に巧みであつて、楚の懐王の信頼を得て内政外交の両面で腕を振るっていたが、同僚の嫉妬や讒言によつて遠ざけられ、漢水の北へと追放された。懐王が秦で客死し、息子の頃襄王が即位すると、朝廷に仕えるようになったが、再び讒言に遭い、江南の地に追放された。屈原は洞庭湖の周辺、沅水・湘水の流域を放浪した末、遂にこの世に絶望して、汨羅江に入水自殺したという(「史記」巻八十四「屈原賈誼列伝第二十四」)。屈原はその憂愁憂思を詩に表していたのだが、それが楚辞と呼ばれ、夙に日本に伝来した。楚辞が日本文学に与えた影響の大きさについては既に多くの論考がある。

それでは、屈原はどのようなイメージで日本に受容されたのであろうか。

屈原の生涯は、賢明な君主に恵まれず、讒言によつて追放の憂き目に遭い、最後に入水自殺するといふ不遇な一生であつた。そのような屈原は日本においても、「詩文の表現世界には周知のさすらい人の典型として印象的」であると指摘され、屈原と言へば水辺に放浪する悲傷な人と見なされていた。屈原に対するこのようなイメージは、楚辞「漁父」に描かれた屈原像に負うところが大きいと考えるのである。「漁父」は、「楚辞」、「文選」、「蒙求」、「古文真宝後集」などの多数の書物に掲載されており、特に「史記」においては、屈原の伝記として収められていることから、日本で最も受容された作品と言つてよい。次に、「漁父」において、屈原がどのよ

うに描かれたのかを見てみよう。

屈原既放、遊於江潭、行吟澤畔。顏色憔悴、形容枯槁。漁父見而問之曰、子非三閭大夫歟。何故至於斯。

屈原曰

世人皆濁 我独清

衆人皆醉 我独醒 是以見放

漁父曰

聖人不凝滯於物 而能與世推移

世皆濁 何不<sub>下</sub><sup>レ</sup><sub>レ</sub><sup>レ</sup> 其泥 而揚<sub>中</sub>其波<sub>上</sub>

衆人皆醉 何不<sub>下</sub><sup>レ</sup> 其糟 而歎<sub>中</sub>其醜<sub>上</sub>

何故深思高舉 自令<sub>レ</sub>放為

屈原曰

吾聞<sub>レ</sub>之 新沐者必彈<sub>レ</sub>冠 新浴者必振<sub>レ</sub>衣

安能以<sub>二</sub>身之察察<sub>一</sub> 受<sub>二</sub>物之汶汶<sub>一</sub>者乎

寧赴<sub>二</sub>湘流<sub>一</sub> 葬<sub>二</sub>於江魚腹中<sub>一</sub>

安能以<sub>二</sub>皓皓之白<sub>一</sub> 蒙<sub>二</sub>世俗之塵埃<sub>一</sub>乎

漁父莞爾而笑 鼓<sub>レ</sub>枻而去 乃歌曰

滄浪之水清兮 可<sub>三</sub>以濯<sub>二</sub>我纓<sub>一</sub>

滄浪之水濁兮 可<sub>三</sub>以濯<sub>二</sub>我足<sub>一</sub>

遂去不復與言

全体を序文と本文とに分けると、傍線を付した序文の部分には放浪してやつれた屈原の姿が描写されている。漁父が登

場し、二人の問答が始まる。その問答には、身を滅ぼしても潔白な生き方を貫こうとする屈原の態度と、世の清濁に順応して、時がよければ朝廷に仕え、時が悪ければ隠逸すべきだと強調する漁父の処世観とが対照的に描かれている。

いま、序文の部分に注目したい。傍線部の四言五句、中でも「行吟澤畔」の句が、屈原の澤畔にさまよう姿を髣髴とさせ、鮮烈に人々の記憶にとどまり、しばしば用いられるようになる。例えば、「蒙求」は、「屈原澤畔」「漁父江濱」の標題の下に「漁父」を記している。また、昭明太子「文選」序は、屈原について、「臨淵有懷沙之志、吟澤有憔悴之容。」<sup>〔一〕</sup>と言い、曹植は「釈愁文」において、「予以愁慘、行吟路辺、形容憔悴、憂心如焚。」<sup>〔二〕</sup>芸文類聚「卷三十五、人部十九、愁、中華書局」と、自身の憂い悲しむ様子を屈原に重ね合わせている。さらに、日本の著名な作例を挙げれば、「日本書紀」巻二、神代下に、

故彦火火出見尊、憂苦甚深。行吟海畔。時逢塩土老翁。老翁問曰、何故在此愁乎。対以一事之本末。

（日本古典文学大系）

とあるが、この「行吟海畔」の句について、「書記集解」臨川書店、一九六九年）巻一は、「楚辞漁父」辞、曰屈原已放、行吟澤畔」と典拠を明記し、小島憲之氏は、「彦火火出見尊が鉤針を失って、海辺をさまよふと云った「行吟海畔」の描写は、楚国の運命を嘆いた屈原の（漁父）序文の引用。略。）を

思はせ<sup>6</sup>」ると述べている。また、「懷風藻」にある石上乙麻呂の伝記に、

嘗有<sup>7</sup>朝譴。飄<sup>8</sup>萬南荒。臨<sup>9</sup>淵吟<sup>10</sup>澤。寫<sup>11</sup>心文藻。遂有<sup>12</sup>衝悲藻二卷。今伝<sup>13</sup>於世<sup>14</sup>。

(日本古典文学大系)

とあり、天皇に疎外され流離する石上乙麻呂の姿が屈原の境遇に重ね合わせられている。さらに、「伊勢物語」第九段は、自分の身を「用なき」者に思い込んだ男が都を離れて、東国に居住地を探し求める話であるが、上野理氏は、「水辺を放浪する男に於いては、屈原のおもかげをおもいかべてもよいのかもしいない」と指摘している。この段には、

三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。(中略)その澤のかきとりの木の陰に下りゐて、乾飯食ひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。

(日本古典文学大系)

とある。「伊勢物語」第九段が屈原のイメージをふまえたものであれば、傍線部の「澤のほとり」も、「行吟澤畔」が意識された表現だと言えるのではないだろうか。

## 二 「行吟澤畔」と屈原

「漁父」序文「行吟澤畔」の句は、日本では屈原の代名詞のように用いられたものであり、第二十一段「人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたる」の句も、「行吟澤畔」を意識したものでないかと考えている。

日本では屈原が描かれる時、しばしば「漁父」が用いられている。「漁父」では、「遊於江潭」と「行吟澤畔」が対句である。屈原は追放され、自然に身を置くことよって悲傷の感情が多少癒され、心の慰められる一時もあったのである。そのような屈原を、「漁父」は、「遊於江潭」(王逸「楚辭章句」では「戲水側也」と説明される)の句によつて髣髴とさせている。しかし、日本ではこの句はほとんど重視されておらず、もっぱら屈原の憂苦を示す「行吟澤畔」の句が用いられている。例えば、「真福寺本文鳳抄」巻五の「三閭澤畔」に対する解釈は次の通りである。

屈原仕楚懷王<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>三閭大夫<sup>リ</sup>遂被流放<sup>ル</sup>行吟澤畔<sup>テ</sup>形容枯槁<sup>セリ</sup>漁父見<sup>テ</sup>問<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>(下略)

(大東文化大学東洋研究所、一九八二年)

また、永青文庫本「和漢朗詠集永洛注」は、大江以言の句「外物独醒松澗色」を説明する時、次のように屈原を述べている。

屈原、字平、楚ノ懷王ニツカヘテ、三閭大夫トイフツカサニナリニケリ。王、コトニ此人ヲ賞シタマヒケレハ、人、ソネミテ、讒ヲイタシケリ。懷王、サムヲ信シテ、屈原ヲシカシハナタレニケリ。屈原、サハノホトリニサマヨヒテ、カタチモオトロヘ、アラヌサマニ、ナリタリケルニ、(下略)

(「和漢朗詠集古注釈集成」第三卷、大学堂書店、一九八九年)

書陵部本「朗詠抄」にも次のようにある。

屈原、字正平、楚懷王仕テ、三閭大夫ト号ス。人々ネタミテ、讒訴シケリ。王ツイニ流シ放チタル。屈原、后ニ沢ノ畔ニサマヨイ、形チヤセ衰テ居リシ時、漁父、江辺ニツリシケルカ、(下略)(和漢朗詠集古注釈集成第二卷上)なお、「吟」の意味は、「天治本新撰字鏡」卷二には「呻也、嘆也」とあり、「芸文類聚」卷十九、人部三、吟の項には「説文曰、吟、歎也。釈名曰、吟、歎也。其声本出於憂愁」。故声嚴肅。使「聽レ之悽歎」也。(中華書局)とあるように、極度の憂愁、悲痛である。

さらに、放浪する屈原の姿が「行吟澤畔」の一句によって描かれる場合もある。

・屈原仕楚懷王<sup>テ</sup>為<sup>テ</sup>三閭大夫<sup>リ</sup>遂被流放<sup>テ</sup>吟澤畔<sup>ヲ</sup> 文選

〔真福寺本文鳳抄〕卷三

・サレバ楚ノ屈原ガ汨羅ノ澤ニ吟テ、「衆人皆醉、我獨醒タリ。」ト、世ヲ憤シテ、漁父笑テ、(下略)

〔太平記 卷三十九〕諸大名讒道朝<sup>ニ</sup>事<sup>シ</sup>道譽大原野花会事<sup>ニ</sup>・日本古典文学大系

特に注目したいのは、以下、「続浦嶋子伝記」と「鳩嶺集」の二例である。

・獨乘<sup>ニ</sup>釣魚舟<sup>ニ</sup>。常遊<sup>ニ</sup>澄江浦<sup>ニ</sup>。伴<sup>ニ</sup>查郎<sup>ニ</sup>而陵<sup>ニ</sup>銀漢<sup>ニ</sup>。近見<sup>ニ</sup>牽牛織女之星<sup>ニ</sup>。逐<sup>ニ</sup>漁父<sup>ニ</sup>而過<sup>ニ</sup>汨羅<sup>ニ</sup>。親逢<sup>ニ</sup>吟澤懷砂之客<sup>ニ</sup>。  
〔続浦嶋子伝記〕・「群書類従」第九輯

・沢吟水冷騒人涙、巖歩雲幽介子情

〔鳩嶺集〕卷下、贈答、源兼孝・宮内庁書陵部図書寮叢刊平安鎌倉未刊詩集

前者は浦嶋子が漁父に従って汨羅江を渡り、屈原に出逢ったことを述べており、後者は屈原のことを詠じている。「吟澤」と「沢吟」はいずれも「行吟澤畔」に拠ったものである。この二例においては、作者は屈原の名前を明記するのではなく、ただ、「吟澤」、「沢吟」、「懐砂」、「騒人」のような言葉をちりばめることによって、屈原の存在を髣髴とさせている。つまり、「行吟澤畔」の句は、放浪する屈原の代名詞のようになり、屈原の名前を明示しなくても、「行吟澤畔」のような言葉を用いるだけで、澤畔にさまよう屈原の境遇がすぐに想起されるという共通認識が作者と享受者の間にあったと考えられるのである。

兼好も屈原をイメージしたから、「人遠く、水草清き所にさまよひ歩」くを書いたのではないだろうか。第二十一段の「さまよひ」という語については、既に「徒然草諺解」に、「漁父辞吟<sup>ニ</sup>沢畔<sup>ニ</sup>」(大阪大学蔵本・寛文九年刊)と注するように、古来「行吟澤畔」の訓読に一致している。「さまよひ歩」くは、「行吟」に通じる言葉であると考えられる。また、「人遠く、水草清き所」も、「澤畔」の意に通じる言葉であると考ええる。「澤」は、「元和本倭名類聚抄」(卷二二〇)に、「風土記云水草交<sup>レ</sup>澤<sup>ニ</sup>音宅」、〔時代別国語大辞典〕に、「水が溜まり、

草などが生えている、じめじめしたくぼ地」と説明されている。こうして、第二十一段の「人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたる」の句は、「行吟澤畔」の意味に通じる言葉であると見られ、そして、兼好はこの句に固定化した屈原のイメージを込めていたのだと考えてよいであろう。

### 三 戴叔倫と屈原と「沅湘」

次に、第二十一段に引用される戴叔倫の詩、嵇康の文章を通して、彼らと屈原との関連について考えていく。

まず、戴叔倫について見る。「新唐書」卷百四十三の戴叔倫伝によると、戴叔倫は、字は幼公と言ひ、潤州金壇の人である。蕭穎士(当時の博学者)に師事して門人の第一人者となった。嗣曹王の李臯が湖南や江西を治めていた時、招かれてその幕下に入り、撫州の刺史、容管経略使などを歴任した。撫州では均水法を作り、容管では蛮族を安んじいたわり、人民に優しい、有能な官吏であったという。晩年は、道士となつて終つたとの説も伝わっているが、明らかではない。ただ、彼の「贈「殷亮」」と題する詩に、

日日河辺見水流 日日河辺に水流を見る

傷春未已復悲秋 春を傷むこと未だ已まざるに復た秋

を悲しむ

山中旧宅無人住 山中の旧宅人の住む無し

来往風塵共白頭 風塵に来往して共に白頭

(「全唐詩」卷二百七十四「戴叔倫二」・中華書局)

とあり、ここに俗世に奔走する身を嘆き、隠逸を願う心を読み取ることができる。

さて、第二十一段に引用される戴叔倫の原詩「湘南即事」は次の通りである。

廬橋花開楓葉衰 廬橋花開いて楓葉衰う

出門何処望京師 門を出でて何れの処にか京師を望ま

ん

沅湘日夜東流去 沅湘日夜東に流れ去る

不為愁人住少時 愁人の為に住まること少時もせず

(「全唐詩」卷二百七十四「戴叔倫二」)

この詩の製作事情について、「三体詩法幻雲抄」が「身不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>去。故怨<sub>二</sub>水之去<sub>一</sub>。所以深傷<sub>三</sub>己不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>去也。蓋叔倫事<sub>二</sub>曹士於湖湘<sub>一</sub>。故有是作。」(抄物大系)勉誠社、一九七七年)と説明するように、戴叔倫が嗣曹王の李臯に仕え、湘南(湘水の流域)の地に赴任するという時期の詩作である。松浦友人編「校注唐詩解釈辞典」(大修館書店)の説明によると、戴叔倫が湘南に滞在した時期は、彼が五十才から五十二才までの一年半以上の期間である。晩年になって、都の長安から遠く離れた地に赴任しなければならぬだけに、懐郷の情と懐才不遇の念を抱いた彼は、そのやるせない気持ちを紛らわすために、川のほとりを巡り歩いたのであろう。そして、「湘南

即事」との題が示すように、湧いてくる情を直ちに一首の詩に託したのである。注目したいのは、詩に、「沅湘」という言葉が詠み込まれていることである。「沅湘」は、洞庭湖に注ぐ沅水と湘水であるが、屈原の詩に繰り返し詠まれた言葉でもある。

・濟沅湘以南征兮 沅湘を濟りて以て南に征き、  
就重華而陳詞 重華に就いて詞を陳ぶ。

・令沅湘兮無波 沅湘をして波無からしめ、  
使江水兮安流 江水をして安けく流れしめよ。

・乱曰浩浩沅湘 乱に曰く、浩浩たる沅湘、  
分流汨兮 分流して汨たり。

・臨沅湘之玄淵兮 沅湘の玄淵に臨み、  
遂自忍而沈流 遂に自ら忍んで流に沈み、

ちなみに、「本朝文粹」巻一に収める前中書王兼明親王の「兔裘賦」においても、「靈均之五願也。繞沅湘而傷楚。」（新日本古典文学大系）と、屈原と「沅湘」が結び付けられている。

上野理氏が「水辺」に屈原を思うのは、詩人のつねであったようだ。」と述べているように、戴叔倫は「沅湘」、さらに「愁

人（心に愁を抱く人）」の言葉を用いることによって、屈原の境遇に自分を重ね合わせていると考える。兼好が「湘南即事」の製作背景を知らなかったとしても、「沅湘」という言葉から屈原を連想し、さらに、「沅湘」や「愁人」の言葉に、戴叔倫と屈原を重ね合わせるイメージを読み取ることはできたはずである。

戴叔倫には、「過三閭廟」という屈原を弔う詩もある。

沅湘流不尽 沅湘流れて尽きず  
屈宋怨何深 屈宋怨み何ぞ深き  
日暮秋煙起 日暮秋煙起り  
蕭蕭楓樹林 蕭蕭たり楓樹の林

（全唐詩）巻二百七十四「戴叔倫」

「三閭廟」は、屈原が死んだ後、後人が彼を祀るために、その入水した汨羅江の付近に建てた廟である。戴叔倫はこの廟を訪れ、詩を詠んだわけであるが、詩に出てくる「屈宋」という語は、屈原とその弟子の宋玉を指す。ここにも「沅湘」の言葉が詠み込まれていることは注目されよう。第二十一段所引の「湘南即事」は「三體詩」に掲載されていることから、兼好はこの詩を「三體詩」によって知ったと考えるのが通説であるのに対し、安良岡康作氏は、兼好が直接「戴叔倫詩集」で読んだと推察している。安良岡氏に従えば、兼好は、「戴叔倫詩集」の「過三閭廟」の詩を知った可能性も十分に考えられよう。だとすれば、兼好は、戴叔倫の屈原を仰ぎ、屈原

の中に自己を見出そうとする点に気づいていた可能性も、またあつたと考えられるのではないだろうか。

#### 四 嵇康と屈原と「山澤」

では、「徒然草」第二十一段に引用されるもう一人の人物嵇康はどうであろう。

まず、兼好が「人遠く、水草清き所にさまよひ歩きたるばかり、心慰む事はあらず。」の句を書いたのは、直前に引用した嵇康の「山沢に遊びて魚鳥を見れば、心樂しむ」という言葉を受けている。「人遠く、水草清き所」は、「山沢」を意識した表現と言つてよい。さき程述べたように、屈原が描かれる時、しばしば「行吟澤畔」の句が用いられている。屈原はまた、「山澤」の語とも結びつき語られている。例えば、王逸の「天問」解題に、「屈原放逐、憂心愁悴、彷徨「山澤」、經歷「陵陸」、嗟號「昊天」、仰「天歎息。」（楚辭章句）」とあり、【真福寺本文鳳抄】卷三の山澤の項に、「楚三閭跡 漢四皓樓 秦松蓋緑 楚意佩芳 天台 雷夏雲夢」とある。第二十一段における嵇康と屈原の直接的な繋がりが、この「山沢」の語にあると考えられてよいであろう。

嵇康は、竹林の七賢の一人である。魏晉の政權交替期は権力闘争が激しく、この上もない暗黒な時代であつたために、嵇康は、政治社会とはいっさい関わりを持たず、作詩、弹琴、

清談（老子「莊子」「周易」を素材とする談論）など、ひたすら充実した隠逸生活を樂しもうとする決意をした。同じ仲間の山濤が吏部郎になつた時、嵇康を自分の後任に推薦しようとしたが、嵇康が「與「山巨源」絶「交書」」（『文選』卷四十三所収）を送り推薦を拒否したのである。【徒然草】第二十一段に見える嵇康の言葉は、この絶交書からの引用であり、原文は次の通りである。

又聞「道士遺言」、餌「朮黄精」、令「人久寿」、意甚信「之」。遊「山澤」、觀「魚鳥」、心甚樂「之」。一行作「吏」、此事便廢。安能舍「其所」樂、而從「其所」懼哉。

嵇康は、山澤に遊んで、魚や鳥を見ると心は樂しむが、しかし、一度官吏になると、これらのことを振り捨てることとなり、どうして樂しみとする境地を捨てて、嫌な境遇に入っていくことができようかと言っている。屈原の「行吟澤畔」に比べて、嵇康の「山澤の遊び」は、自然を愛し、自由でわがままな隠逸生活を満喫したように見えるが、しかし、「與「山巨源」絶「交書」」の文脈を踏まえて読むと、「遊「山澤」觀「魚鳥」、心甚樂「之」」の言葉は単なる隠逸生活の樂しさを述べたものではなく、偽善に満ちた政治社会に対する抗議であることは明白である。嵇康は、この絶交書を書いた僅か二年後に、友人呂安の事件に連座して、刑死という痛ましい最期を迎えた。その刑死の背後的な事情として、当時の有力者である鐘会の讒謗が指摘されている。<sup>13</sup>俗世と調子を合わせない

生き方と、讒言によつて不遇に終わった点において、嵇康は屈原に非常に似ていると言えよう。

おわりに

本稿では、「徒然草」第二一段末尾の「人遠く、水草清き所にさまよひありきたる」の句は、日本で固定化した屈原のイメージを髣髴とさせる言葉であることにつき考察を加え、さらに、この章段に引用される戴叔倫の詩、嵇康の文章と屈原との関係について検討を試みた。兼好は、戴叔倫の詩と嵇康の文章に屈原の面影を読み取り、さらに戴叔倫と嵇康を屈原の面影を宿した人物として捉え、この段はそのような連想で繋ぎ合わされているのではないかと考える。

兼好は、戴叔倫の詩と嵇康の文章をただ断章取義的に引用したのではない。また、戴叔倫と嵇康を単に自然の興趣を楽しむ風流な詩人として捉えたのではない。兼好は、彼らを屈原に繋がる不遇な人、漂泊者として捉えたのである。屈原、戴叔倫、嵇康は、逆境にあつて、憂怨の情を文学によつて表現した。その作品の持つ感傷性と孤独感に、彼らの山澤水辺にさまよう姿が重なり、兼好の共感をいたく唆つたのである。そして、心を慰める自然現象を列挙した第二一段において、その不遇な姿を引用したのである。

注

(1)「源氏物語」のこの箇所を典拠として、松永本「花鳥余情」は玄賓の和歌を掲げる。三木紀人氏「徒然草全訳注」、久保田淳氏「徒然草評釈・五十七」（『国文学解釈と教材の研究』二九一六、一九八四年五月号）に指摘されているように、松永本「花鳥余情」には、「嵯峨の御代に玄賓を僧都になされし時官牒を樹にさしはさみて歌を詠して深心に入れるその哥云」とつ国は水くさきよみことしけき都の中はすまますまされり」（伊井春樹編「松永本花鳥余情」桜楓社、一九七八年）とある。

(2)「江談抄」第一・四七「同じく大僧都を辞退する事」には、「外国は山水清し事多き君が都は住まぬなりけり」（新日本古典文学大系）とあり、「閑居友」上・三「玄賓僧都、門を閉して善珠僧正を入れぬ事」には、「とつ国は山水清しこと繁き君が御代には住まぬまされり」（新日本古典文学大系）とあり、「古今著聞集」卷五・一四三「玄賓僧都位記を樹枝に挿みて詠歌の事」には、「外つ国は水草きよしことしけきあめのしたにはすまぬまされり」（日本古典文学大系）とある。第二句に異同がある。

(3)伊藤博之「撰集抄における隱遁思想」（『仏教文学研究』五、一九六七年五月号）

(4)「漢書」芸文志によると、屈原の作品は全部で二十五篇ある。また、後漢王逸の「楚辞章句」では、離騷経第一（一篇）、九歌第二（十一篇）、天問第三（一篇）、九章第四（九篇）、遠遊第五（一篇）、卜居第六（一篇）、漁父第七（一篇）、以上二十五篇が屈原の作とされている。藤野岩友氏「平安朝の漢詩文に及ぼした楚辞の影響」（『東洋研究』第四十六号、一九七七年五月号）によると、「王注楚辞十六卷本が天平二年（七三〇）に書写され」、「平安朝になると、

日本見在書目、楚辭家に楚辭十六卷<sup>まき</sup>、楚辭音義が著録されて「いる。

嵇康を弾劾する文章が載せられている。

(5) 渡辺秀夫「平安朝文学と漢文世界」第七章「伊勢物語」における漢詩文受容 古詩十九首（勉誠社、一九九一年）

※「徒然草」本文の引用は、新日本古典文学大系（岩波書店）によった。

(6) 小島憲之「上代日本文学と中国文学」上、「第三篇 日本書紀の述作 第四章 日本書紀の文章（一）神代紀」（搞書房、一九六二年）

(7) 上野理「伊勢物語「あづまくだり」考」（「文芸と批評」二一九、一九六八年七月号）

(8) 「贈殿亮」「湘南即事」二首の訓読は村上哲見著「三体詩」（朝日新聞社新訂中国古典選）を参照した。

(9) 上野理 注（7）前掲論文。氏は白居易の「答元八宗簡同遊曲江後明日見贈」を挙げるが、その外に、前漢の賈誼が、長沙に左遷される途中で湘水を渡る時に、「弔屈原文」（「文選」卷六十）を作って水に投げ入れて屈原を弔ったのも有名である。

(10) 「三閭廟」について、北魏の壞道元の「水経注」（卷三十八、湘水）は次のように描いている。

汨水又西為「屈原潭」。即汨羅淵也。屈原懷「沙自沈」于此。故淵潭以「屈為」名。（中略）淵北有「屈原廟」、廟前有「碑」。

（巴蜀書社、一九八五年）

(11) このことに関して、「文選」李善注に、「魏氏春秋曰、山濤為「選曹郎」、拳「康自代、康答書拒絶、因自説不堪」流俗「而非薄」湯武、「大將軍聞而惡之。」（「文選」附考異・芸術印書館）とある。

(12) 嵇康の刑死の事情、及び嵇康と鐘会との関係については、「晋書」卷四十九の嵇康伝、「世説新語」の雅量篇、文学篇などにその記載が見える。なお、「世説新語」雅量篇注引文士伝には、鐘会の

（しゃ・りつぐん 本学外国人客員研究員）